

陳舜臣さんを語る会通信

NO.129 Nov. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年11月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

いくつかの陳舜臣観、陳舜臣論の紹介

陳舜臣さんを語るとき、「中国人作家」、「華人作家」、「台湾系華人作家」、「台裔作家」などの冠詞が付き、また、氏の小説作法から、複眼作家、コスモポリタンなどと表現されます(例えば下にあげた「正平調」)。

また、学者、研究者のオリジナルな陳舜臣観、陳舜臣論もあります。これらについて、順不同で紹介いたします。※台裔とは「台湾出身あるいは台湾を経由して海外に渡った華僑・華人の子弟」という意味です。

正平調

神戸・海岸通。東南ビル地階で中華料理店「桃源亭」を営む陶展文が探偵さながら殺人事件に挑む。戦後を時代背景にし、複雑に絡みあつた系を丁寧にほぐす――◇存じの読者も多いだろう。作家陳舜臣さんの江戸川乱歩賞受賞作「枯草の根」(1961年)である。陳さんは24年2月18日に神戸市で生まれた。神戸を舞台にしたミステリー作品のほか、中国歴史作品、神戸愛に満ちたエッセー。沖縄を舞台にした「琉球の風」はNHK大河ドラマになった◆人生は波乱の連続だった。両親は台湾出身であり、戦争や政治に翻弄され国籍は二転三転。アジアの安定や平和を願い、本紙連載「わが心の自叙伝」で、創作活動にあたり「コスモポリタン(国際人)としての視線を失うまいと心がけた」と語っている◆阪神大水害、阪神・淡路大震災で変わり果てた街に心を痛め、「戦争も平和も、災害も繁栄も、私はいつも神戸とともに経験した」(「神戸ものがたり」と書き残す◆来年は生誕100年。ネットミュージアム兵庫文学館に陳さんの言葉や足跡が記されるが、偉大な思想家が神戸で十分に語り継がれているのだろうか◆日本、台湾、中国の緊迫感が増す現代をコスモポリタンがどう見るのか。今こそ作品群を読み返したい。

2023.10.9

1. 稲畑耕一郎著『境域を越えて 私の陳舜臣論ノート』

「陳舜臣論」という言葉を含む書名の本は他にあるのだろうか。稲畑耕一郎(当時、早稲田大学教授)著『境域を越えて 私の陳舜臣論ノート』(2007 創元社)も、「ノート」とつけ加えられている。「ノート」といえば、すぐに大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』や『沖縄ノート』を思うが、「ノート」は通常、書き留めたもの、記録、手記、覚え書きといった意味合いで使われている。

『境域を越えて…』も、「陳舜臣論」と言い切るまでには熟していない、昇華していないということなのでしようか。

陳舜臣全集には、『陳舜臣全集』全二十七巻(講談社 1986~88)と『陳舜臣中国ライブラリー』全三十巻(集英社 1999~01)の二つあるが、稲畑氏は双方の編集に深く関わられた。

『境域を越えて…』は前編十六章、後編十章からなる。「後記」で稲畑氏は、次のように記されている。

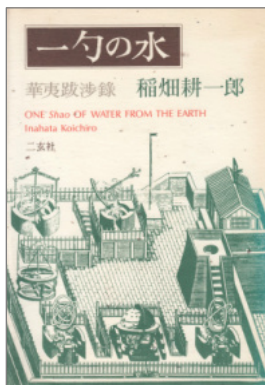


前編の文章は、『陳舜臣全集』全二十七巻の通巻の解説として書いたものであり…。後編の文章は、雑誌の書評や文庫の解説として書いたものである。その大半は、集英社の『陳舜臣中国ライブラリー』全三十巻の毎巻末に「自作の周辺」としてつけられたものである。

ところで、『境域を越えて…』の巻末に「対談存目」として、陳舜臣さんとの、三十六回の対談目録が掲載されている。こんなに、陳舜臣さんとまとまった話をされた方は他にあるのだろうか。

陳舜臣さんの「稲畑耕一郎『一勺の水』書評」『含笑花の木』に次のような文章がある。興味深い。

稲畑氏と四川、雲南をともに旅したとき、「こんな大名旅行ははじめてです」と、彼が言ったことを思い出す。大名旅行といっても、飛行機を利用し、まずまずのホテルに泊っただけである。けれども稲畑氏にしてみれば、中国を知るためには、もっと民衆に近づかねばならないのだ。



二玄社 表紙

2. 樋口大祐氏執筆の新聞記事【アジール(避難所)としての海港都市神戸】

樋口大祐氏執筆の新聞記事【アジール(避難所)としての海港都市神戸】を取り上げます。ここで、氏は、神戸港を「アジール」(避難所)という視点でとらえ、陳舜臣著『他人の鍵』に描かれた「外人長屋」に住むルーツの異なる貧しい家族に言及しています。『他人の鍵』については、本通信No. 68をご一読ください。



「外人長屋」の面影を感じさせる仏蘭西館
(於:北野町 編集委員撮影)

60年代に書かれた陳舜臣『他人の鍵』には、かつてこの地域に少なくなかった貧しい外国人家族が登場する。北野天神下の「外人長屋」で、白系ロシア人の母に育てられた若い女性・清原織雅(おりが)は、日本人の豪商の愛人になって戦時下を生き延びるが、戦後、自身の運命を開くために進駐軍の青年を誘惑し、邪魔になった豪商を殺すためにその邸に忍び込む。

小説は「外人長屋」に住む織雅の幼なじみたちの視点を通して進行する。広東料理のcockの息子、ポルトガル人ピアノ教師の息子、ラシャの行商をして島出身の单身女性の息子。ルーツの異なる幼なじみたちは「自分たちがまわりから支えられずに、浮き上がった存在である」と感じつつ、ぎこちない神戸弁を駆使して生きている。

「他人の鍵」は観光地に変貌する以前の北野を舞台に、移民2世の青春の陰翳を印象深く描き出しているのである。(神戸大人文学研究科教授 樋口大祐)

【アジール(避難所)としての海港都市神戸】
2022年3月12日神戸新聞(夕刊)より抜粋引用

いるトルコタール人一家の兄妹、管理人である五

「外人長屋」住人			
	西	中	東
二階	ポルトガル人ピアノ教師(アルナルド・モッタ)と息子マルスケ(マルセリーノ・モッタ)	終戦後に入居した白系ロシア人家族。老夫婦と30歳に近い息子、その妹	ラシャの行商をしているトルコタール人と息子アリー・バヤル、その妹ファティマ
一階	広東料理cock夫婦と息子張彰仁、その弟、妹、居候の彭増嘉	管理人友島あき子と息子隆夫	清原織雅 この部屋で生まれる

(編集委員作成)

3. 『杭州菊花園』徳間文庫「解説」(川村湊) キーワードは「ディアスポラ(離散民)」

『杭州菊花園』徳間文庫版「解説」 川村湊
カルチュラル・スタディーズとしての陳舜臣作品
傍線は編集委員の加筆

近年、文学や思想の研究の世界では、「ディアスポラ(離散民)」とか「サバルタン(被抑圧者)」といった言葉が流行している。また、ポスト・コロニアリズムとか、カルチュラル・スタディーズといった術語も、一般化するようになった。

カルチュラル・スタディーズは、今までの単なる文化の研究とは違って、文学作品や文化現象として表面的に浮き上がってくる「文化」がいかに「政治」に浸透されているか、「文化」といった上部構造が、政治的な抑圧構造や政策の「影響」を受けているかといった観点から、一国の、あるいは民族の文化研究を行うもので、社会学、文化人類学、フェミニズムなどの成果を援用してマイノリティー(少数民族、社会的少数者)や障害者など、社会的弱者や被抑圧者に対する「文化研究」が試みられているのである。

陳舜臣氏の主に一九七〇年代に書かれた短篇を集めた本書を読んで、その発表当時に日本に「カルチュラル・スタディーズ」が入っていたら、まさにその研究対象としてびったりの文学作品として珍重されたいに違いないと思った。

ここに収められた七篇の短篇小説は、そのほとんどが日本人ではない(非日本人)主人公もしくは語り手を持ち、作品の舞台も中国の杭州であったり、北京の骨董街・琉璃廠であったり、新疆ウイグル自治区のウルムチであったりして、いかにも「ポスト植民地主義(コロンアリズム)」的である。

文庫版表紙↓



4. 樋口大祐論文「多重所属者の軌跡 — 陳舜臣の1930年代小説と華人ディアスポラ」

目次に沿って、各節、要約いたします。
傍線は編集委員の加筆。

一 はじめに

まず、歴史小説を時代背景によって四分類

【第一グループ】一〇〜一四世紀における、遼・金・元や中央アジアの歴史を背景とする『耶律楚材』『桃源郷』等

【第二グループ】一六世紀〜一七世紀の所謂、明末清初の時代における東アジアを背景とする『風よ雲よ』『旋風に告げよ』『琉球の風』『叛旗 小説李自成』等

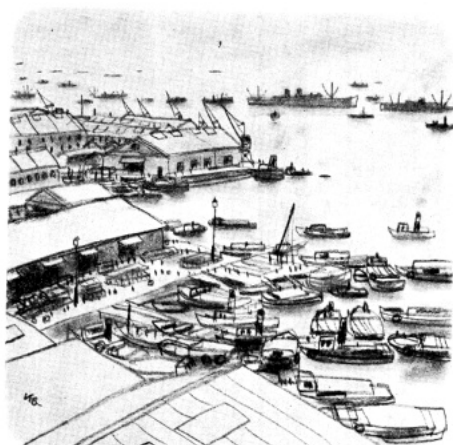
【第三グループ】晩清以後の近代中国と世界を背景とする『阿片戦争』『太平天国』『天球は翔ける』等

【第四グループ】一九三七年から始まる日中戦争の前後の時代を背景とする『残系の曲』『青雲の軸』『桃花流水』等

※(注)で、『山河在り』もこのグループに数えることができるとおっしゃっている。

樋口論文「多重所属者の軌跡」は前述【第四グループ】の三作品を中心に記述されています。次に抜粋引用します。

本稿はこれらの小説の構造・要素を、主に①出生の秘密(強いられた複数性)、②自己の道の探求(投企と断念)、③結末と新たな反復の予感、の三点に留意しながら検討し、主人公である多重所属者の語られ方について考えて見たいと思う。



神戸港の風景

朝日新聞社『残系の曲』挿し絵

「彼の新しき「環境」が日本・中国・台湾という相異なる立場にまたがる、海港都市の外国人家庭であったということである。そのことが一九三〇年代という時代とあいまち、彼の軌跡が時代の大きな激動と交差する必然性を生み出しているといえる。」

二『残系の曲』— みなし児は海港をめざす

樋口論文を離れて、先に、本号の一頁にあげた稲畑耕一郎著『境域を越えて 私の陳舜臣論ノート』の記述を引用します。

その頃、金の無心に現われた養母から、修平は関家とは血縁関係はなく、菊子と日本人との間に生まれた子であると告げられる。

日中両国の血を享けたものとして、激動する時代の荒波の中に翻弄されながらも、懸命に生きようとしてきた修平は、この言葉に大きな衝撃を受ける。果たして、自分は何者なのか。出生の秘密、血の証明のために、修平は一層深い苦悩を抱く。...

作者陳舜臣は、主人公をなぜこのような複雑な境遇に生いたった者として設定しなければならなかったのだろう。(同著、181)

次に、樋口論文に戻り、この節の見出し、「みなし児は海港をめざす」に係する記述を引用します。

修平の物語が特異なのは、彼の新しい「環境」

三『青雲の軸』 「待機」の中の青春

この節、「日本語で小説を書く作家・陳俊仁は...、出生地は神戸だが故郷は台湾である。子供の頃、家の内と外で違った言葉が使われているのが自分の家だけだと知ってショックを受ける」で始まり、主人公を多重所属者としてとらえ、記述される。

そして、次の文章が続く。

人は生まれながらにしてディアスポラなのではない。「自分がほかの子供とおなじでない」ことを何度も確認していく体験の中で、自覚的なディアスポラになるのだ。

また、こんな記述があります。

小説は戦争が終わり、ジョン兄妹たちと「新しい時代」の到来を喜び合うところで終る。しかし、「新しい時代」とは「祖国の懷に抱かれる時代」という意味か。それともディアスポラである彼らが、その属性を封じ込めずに生きていける時代という意味だろうか。

この節では、ディアスポラという述語が何度も出てきます。通常、ディアスポラとは、ユダヤ人のように、世界に「撒き散らされた」人々をいう語のようですが...

なお該論文は緒形康編『一九三〇年代と接触空間 ディアスポラの思想と文学』(2008 双文社出版)所載です。

残る次の二つの節は省略いたします。

四『桃花流水』二重スパイの眼差しによる日中戦争

五 多重所属者の未来

5. 「多重所属の物語作家として」 樋口大祐(神戸大学大学院人文学研究科教授・日本語文学)

実行委員会編『生誕100年記念 陳舜臣さんが語りかけるもの 2024』(p. 8-9)より引用します。下線は編集委員の加筆。

陳舜臣氏の小説は単行本として出版された後、大半が数年後に文庫化されている。彼の小説は神戸を舞台とする推理小説と、中国史を背景とする歴史小説が多いが、いずれも現代の平均的日本人読者が簡単には感情移入しにくい内容の物語であり、それらの大半が文庫化されていることはかなり特殊な現象であるということが出来る。

そこには、卓抜なストーリーテラーとしての陳氏の才能や、日本語を母語としない台湾人移民の三世である陳氏が、日本の読書市場に切り込むために、敢えて戦略的に平易な日本語を物語の文体として選択したという事情が存在していると思われる。が、おそらくそれだけではない。

特に前者の推理小説群の場合、語り手や読者に対してまず事件と関連する「謎」が提示され、視点人物によって徐々に、当初覆われていた「真実」が解明されて行くという物語の構造が存在する。その構造は、1930~40年代の日中戦争の時期における神戸華僑の引き裂かれた(二重化された)存在形態と、それを戦後の平和な時代の視点で語り直す営為と重

なる部分を持っている。戦前の神戸華僑にとって、日中の対立の中で引き裂かれたことは悲劇的な体験であったにちがいない。しかし、1930~40年代を「強いられた多重所属」者として神戸で過ごした(自伝的小説『青雲の軸』等参照)陳氏は、両者の構造が相似形をなすことを逆手に取ることで、その推理小説に(他の日本人作家には望みえない)異様な歴史的リアリティを与えることに成功したのではないだろうか。後年の彼の歴史小説においては、個々の民族を超えた人類の共存をめざすスタンスを持つ登場人物が描かれ、そのことを作者のポジティブな思想の表われとして受け止める傾向があるように思われる。しかし彼の創作活動の原点に、日中戦争時期のトラウマ的な経験があるだろうことはいくら強調しても強調しすぎることはない。彼の創作活動には、日中戦争下で在日華僑が被った歴史的な苦難の代償としての意味合いが含まれているのではないだろうか。



6. 笹沼俊暁論文「国家を超える学問の力を — 陳舜臣ノート」『社会文学』(42)2015

2 陳舜臣は、…、司馬遼太郎とならび戦後最大の歴史小説作家の一人といつてよい。だが、司馬遼太郎が没後に「国民作家」などともてはやされたのに比べると、日本メディアの陳舜臣逝去に対する反応は、奇妙なまでにひかえめである。政治思想にかかわる時事問題への直接的な発言による話題性が比較的小なかつたこともあるかもしれない。だが、「嫌韓嫌中」を煽る書籍が氾濫し、露骨な排外主義を政権が事実上権力基盤とし、しかもそれがさして問題にされないような昨今の社会風潮も、「華

1 二〇一五年になってまもなく、作家・陳舜臣が亡くなった。…一九九〇年に日本国籍を取得するも、依然として中華民国国籍をもち、神戸在住の代表的な華僑作家として名高い。私は、数年前からこの陳舜臣のことが気になり、いつかはそれについての考察をまとめてみたいと考え、少しずつ準備を続けてきた。

ささめまじしあき
笹沼俊暁氏は日本文学研究者で、台湾・東海大学の教授です。各項ごとに、編集委員が気になった箇所を抜粋・転載いたします。傍線は編集委員の加筆。

「中国人」としてのアイデンティティを文学主題の一つとした陳舜臣に対する冷淡さの背後に、ないとはいえない。

3 二〇〇〇年代以降になると、日本国内では、中国の経済大国化の「脅威」がしばしば強く語られるようになった。メディアは「尖閣諸島」「反日デモ」「環境汚染」「言論弾圧」などの問題を連日取り上げ、中国の経済発展やナショナリズム膨張のマイナスの側面を、おどろおどろしく報道するようになった。特に東日本大震災以降、歴史修正主義と排外ナショナリズムが急速に強化化し、猛威を振るう現在の日本の状況において、中国ナショナリズムと民族資本の形成を根幹のメッセージの一つとする陳舜臣文学は、日本メディアにおいて、「話題としづらい」と観念されているかもしれない。そこが、メディアでの陳舜臣死去のニュースを冷ややかなものにしていく理由の一つなのでないだろうか。

だが、一九九〇年代以降の陳舜臣の作品をみると、むしろ、国家や民族を乗り越えようとするメッセージ性が強いことに気づかされる。

以下略。



7. 垂水千恵論文「台裔作家が描く台湾表象-陳舜臣・東山彰良を中心に-」

垂水千恵氏略歴■1957年生まれ。台湾文学研究者。現在、横浜国立大学名誉教授。

本稿は 2016 年 5 月 25、26 日に台北で開催された国立東華大学華文文学系主催「第七屆「文學傳播與接受」國際學術研討會」における報告論文、「台裔作家的台灣／中國書寫——以陳舜臣、東山彰良為中心」の日本語原稿に加筆訂正を加えたものである。（論文中的注1） ※ネットで検索できます。

引用文中の下線及び番号は編集委員の加筆です。

《1. 「要旨」》

2015 年 7 月、東山彰良が『流』によって第 153 回直木賞を受賞したことは、邱永漢、陳舜臣に続く三人目の台湾出身者の直木賞受賞として、台湾でも大きな話題となった。本稿はこれら三人の作家のうち、特に「ミステリー」作家という観点から陳舜臣と東山の類似性に着目し、「台裔」という身分が彼等のエクリチュールにどのように反映しているのか、という問題を、台湾表象に注目して論じるものである。

「台裔」/「台湾出身あるいは台湾を経由して海外に渡った華僑・華人の子弟」という地理的意味合いに限定して「台裔」という呼称を用いる。（論文注1）

エクリチュール/書体、文体というほどの意味か。

台湾表象/難解な言葉です。しかし、論文中的「中国語要旨」では、次のとおり臺灣書寫、日本語訳すると、台湾描写としか表現されていない。

以「推理小説」作家的觀點，聚焦於陳舜臣和東山彰良的相似性，進而探討「台裔」之身份如何反應在他們的作品上的臺灣書寫。

《2. 論文「4 陳舜臣作品における台湾表象」》

この章ではデビュー作『枯草の根』（1961）の翌年に発表された『怒りの菩薩』を取り上げている。

抜粋引用します。

松本清張は『影は崩れた』（1966）の「解説」において「神戸ばかりを舞台にしていた作者として、台湾にふさわしい謎は是非書きたかったものだろうが、これを読んだ観音村出身の留学生から、「拝啓陳舜臣殿」という七十枚の詰問状が舞いこんだ。①作者の政治意識を弾劾したものだったそうだが、お陰で氏は、エンターテインメントの作品には台湾を使うまいと決心した由である」と述べている。確かに台湾を舞台としたミステリーは『怒りの菩薩』しかない②だけに、陳の台湾表象を考察する上では抜かすことのできない重要な作品であると言える。

『怒りの菩薩』については『陳舜臣さんを語る会通信』No. 3で、更に下線①については、同通信No. 48で取り上げていますのでご一読願います。また、下線②ですが、長編ではそうですが、短編ではいくつか

あります。「シンカンの若者」（本通信No67）、「祖師廟にて」（No71）、「鉛色の顔」（No74）、「望洋の碑」（No83）などがそうです。推理小説ではありませんが、「潜伏者」（No117）も台湾を舞台にしています。

続けて、少し長くなりますが引用します。

主人公の「私」には、1946年3月から1949年10月までの約3年半を故郷の新莊で過ごした陳自身の心境がかなり投影されていると考えていいだろう。

汪精衛陣営に寝返った漢奸、国民党の将校、日本帰りの台湾人留学生、中国大陆で抗日活動に参加した台湾人、皇民化運動に協力した台湾人有力者、そして引き揚げを待つ日本軍兵士など、終戦直後の台湾における様々な民族的立場の人物が書き込まれているという意味でも、『怒りの菩薩』は非常に興味深い作品である。『観音村出身の留学生』は一体どういう立場から「作者の政治意識を弾劾」したのだろうか。

まず、考えられるのは、『怒りの菩薩』の随所に現れる、国民党および外省人に対する距離感である。まず台湾に帰郷したばかりの「私」には「中国の兵隊」が「見ばえがしない」「間のびのした顔つき」（集英社1985版p.27）に映る。また「戦後、大陸から渡ってきた連中は、きわめて評判がわるい。台湾に帰って二日もたたないうちに、私は彼らをのしる「ブタ」という言葉を、なんべんも耳にした」（p.77）。崔上校と葉中校に対しては最初は好印象を持ち、「これが中国人だ。これこそ中国人だ」（p.78）と「感激」するものの、本音では「印象は悪くないのだが、なんとなく気が許せないのである。われわれが胸襟をひらいて語りあえるのは、結局、環境や生活様式を同じくする人たちだけではないだろうか？」（p.192）と考えている。やがては「植民地的な統治に、われわれ台湾人がどんなに抵抗を感じるか、蒋介石は知らんのでしょうか？」（p.260）と国民党政府に対する批判をはっきりと口にする。しかも、結局林景維の犯人は崔上校であり、もし、その手紙を書いた留学生が…。

（次頁に続く）



集英社文庫版の表紙

7. 垂水千恵論文「台裔作家が描く台湾表象-陳舜臣・東山彰良を中心に-」(続)

(前頁より続く)

『怒りの菩薩』登場人物 (編集委員作成)

楊輝銘	日本に留学、大学卒業後、日本で就職。終戦の翌月に結婚し、半年が過ぎたばかり。1946年春、新妻林彩琴を伴って台北に帰郷
林彩琴	台北からバスで20分ほどのところ、菩薩庄の大地主、林家の娘。楊輝銘の妻。日本に留学、女専を卒業
林珠英	林彩琴の姉
林景維	林家の長男、彩琴の兄。東京に留学、その後、日本の植民地統治に反抗して、陸宙と語らって大陸へ。両親は、陸宙がそのかしたと思っている
陸宙	陸家の長男
陸枢堂	陸家当主。陸家は、代々地主で、「書院」を経営する。名望家
陸杏	陸宙の妹。林彩琴の親友
崔上校	事件を捜査する警備司令部の将校
葉中校	事件を捜査する警備司令部の将校。崔上校の部下

もし、その手紙を書いた留学生が国民党寄りの人物であれば、確かに「作者の政治意識を弾劾」したくなるかもしれない。が、逆に「観音村出身」の非常に本土意識の強い「留学生」であれば、日本帰りの「私」と国民党の軍人が「戦乱の時代を、よくぞ生きのびてきたという感慨」(p.132)を分かち合い、「これが中国人だ。これこそ中国人だ」(p.78)と感激する、という設定に腹を立てたのかもしれない。

実際、この「私」の語りには一貫性がなく、その設定も成功しているとは言いがたい。「戦乱の時代を、よくぞ生きのびてきたという感慨が、二人のあいだに共通している。相似た経験をもつ者同士は、強い共感と親しみを、互いに抱くことができるらしい」(p.132)などという「ひとの話を信じやすい純な青年」(p.283)であるため、崔上校のアリバイ作りに利用される人物と設定されていながら、その後では特に理由もなく「中国の版図に復した台湾人は、新しい不幸を背負った」「(外省人とのつきあいは)まことにわずらわしいことである。ことに、疲れているときなど、彼らの相手をする気にはなれない」(p.193)などと逆の感想を漏らしたりもしている。つまり、「私」の語りには設定をはみ出して、作者陳舜臣の本音が現れた、と思われる部分が多い。まさに松本が伝えているように「故郷を舞台としたため、詠嘆が多かった」のであり、そのことを陳自身も自覚し、失敗作として全集には収録しなかったのかもしれない。

《3. 論文「5 まとめ」》

以上、「台裔作家」東山彰良と陳舜臣が、ミステリー作品において台湾を如何に描いているか、という問題について論じてきた。真相への距離が台湾と中国の政治的距離と重なられている東山『流』に対し、陳の場合は、台湾表象において忌避や混乱が見られる、という違いがある。それはこの両者が同じ「台裔作家」といえど、1987年の戒厳令解除をさんだ全く異なる時代を生きてきたことによるものである。

陳は、台湾を題材としては『枯草の根』の水準を維持したミステリーを描くことはできなかった。だが、それは決して陳が神戸育ちで、台湾を知らなかったからではない。むしろ事情は逆であって、自伝『道半ば』に詳述されているように、20代前半の1946年3月から1949年10月までを故郷新莊で過ごし、自ら二二八を含む戦後台湾の激変を体験したからである。この台湾体験を作品化するのにふさわしいジャンルは、「生物体的体質」を持つ「ふつうの小説」でなければならなかった。しかし、1987年まで続いた台湾での戒厳令が影響したのであろうか。陳が「ふつうの小説」において戦後の台湾を正面から描くことはなく、台湾への思いを封印したまま、彼の関心は中国歴史小説へと向かっていった。もし2015年1月に死去した陳舜臣が、同年5月刊行の『流』を読んでいたらどんな感想を持ったのだろうか？ 戒厳令解除以降の台湾民主化を背景とする東山の闊達さに、深く羨望の吐息を漏らしたのではないだろうか。

『怒りの菩薩』刊行の約10年後、陳は自分は日本人か、中国人か、というアイデンティティの不安を抱えた神戸の華僑・関修平を主人公とした歴史小説『残系の曲』(1971)を発表している。1961年「枯草の根」でデビューして以来、推理小説を中心に執筆してきた陳が中国歴史小説に向う分水嶺に位置する作品と言える。

(この作品で)陳は修平が上海で台湾独立運動を行う実姉と再会し、自らの進む道を決意する、という結末を用意している。陳が東山のように正面から戦後台湾を描くことはなかったかもしれない。しかし、「中国」歴史小説家として大成していく軌跡の中にも、台湾は常に彼の「根」として存在していたのである。



講談社『流』表紙